大忍び　アフリカオオコノハズク【完結】

難民180301

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミミちゃん助手「博士がおかしくなったのです……」

コノハ博士「ひとぉつ！」

目次

大忍び　アフリカオオコノハズク　1
巴流　かばん　15
侍大将　ヘラジカ　29
ぬしの白蛇　43
葦名弦一郎　67

大忍び　アフリカオオコノハズク

博士がおかしくなったのです。
「如何(いかが)した、ミミちゃん助手」
「……その声でそう呼ばれると怖いのでやめてほしいのです」
「ふむ」
博士の姿は、変わり果てていました。
頭の後ろの毛皮、ヒトで言えば後頭部の髪の毛が地面につくくらい伸びて、それを三つの房に束ねて編んでいます。腕を組んで堂々と立っている姿からは博士らしくない威厳がにじみでているのです。声も妙にねっとりした渋いものになってしまって、おかしくなったとしか言いようがないのです。
「どうして、どうしてこんなことに……」
博士がこんなになったのは、つい昨日のことだったのです――

――

私と博士はジャパリパークの長なのでとても賢く、図書館を縄張りにしています。図書館には自分が何のフレンズか調べに、新しいフレンズがよくやってくるのです。

あの日やってきたフレンズも、自分が何のフレンズか分からなくて困っていたようでした。

だから私と博士は口を揃えて「ニホンオオカミのフレンズなのです！」と教えようとしました。

ですが――

「久しいな、オオカミよ」

「義父上……お久しぶりにございます」

「えっ!?」

知り合いなのですか？　フクロウがオオカミの父？　ってか博士の声渋っ！

びっくりして何も言えない私を置いて、二人は勝手に続けました。

「またお会いできるとは……」

「ふん。仏の導きか、竜胤のもたらした奇縁か……まあよい。して、如何(いかが)する？」

「は？」

「貴様の主はすでにおらぬ。如何に生きるかと聞いておる」

「主なき身なれど、敵を殺すがオオカミの定め。セルリアンを斬って参ります」

「良かろう。まことのオオカミとして生きよ」
「は」
驚いた様子のことを鳩が豆鉄砲を食らうと言うそうですが、まさかミミズクの私がそんな状態になるとは思いませんでした。この二人は何の話をしていたんでしょう？
どうにか分かったのは、オオカミがセルリアンを狩るハンターとして生きたいということ。セルリアンは我々フレンズを襲う悪いやつなので、狩れるならどんどん狩ってほしいのです。オオカミのフレンズは強いことが多いですし、大丈夫でしょう。
と、その場では納得したのです。

そして話は今に戻ります。
私と博士はしんりんちほーの上空に滞空しつつ、森の中を観察していました。オオカミのフレンズがしんりんちほーに現れたセルリアンと戦っていると聞いたので、様子を見に来たのです。
我々は目がいいので、下の方で戦っているオオカミがよく見えます。
セルリアンの弱点を的確に爪と牙で攻撃していますね。すごく手慣れた感じがしま

すし、ハンターとして十分やっていけるでしょう。
ですがセルリアンがパッカーンするたびに、
ＳＨＩＮＯＢＩ　ＥＸＥＣＵＴＩＯＮ
よく分からない文字が見えるのは気のせいでしょうか？
なんにせよ我々、難しい文字は読めないのです。気にしないことにして、帰りましょう。
「うまくやっているようなのです。帰りましょう博士」
「ミミちゃん助手よ」
「だからその呼び方やめるのです」
「この輝きがさんどすたーなるものか？」
話聞いてませんねこいつ……。
博士が目線で示したのは、セルリアンがパッカーンするときに飛び散る七色のきらめき、サンドスターでした。今まで何度も見てるのに、今更なぜ聞くんでしょう。
「そうです。これに触れた動物がフレンズになって、たまにセルリアンも生まれるのです。不思議な力なのです。それがどうしました？」

「……なるほどな」
「納得したなら帰りますよ」
「引っ張るのはやめい」
長い三つ編みおさげを引っ張って、我々は縄張りへ帰りました。

博士がおかしくなってから一ヶ月。
オオカミのフレンズはハンターとしてうまくやっているらしく、ときどきやってくる他のハンターたちから活躍を聞きます。あのよく分からない文字は他のフレンズにも見えるそうで、オオカミに助けられたフレンズがパークの色々なところに「忍⊠」と書き込んでいるとか。ずいぶん変わったマーキングが流行してるのです。
おかしくなった博士は相変わらずおかしくなったままで、もとに戻る気配がないのです。
でももうずっとおかしいままでもいいか、と最近思いました。というのも、
「まだですか？　私は腹ペコなのです」
「まこと勝手な鳥よ。ほれ」

「……！」

ジャパリマンの工場からちょいしてきた食材で、博士が作ってくれたおはぎと言われる料理。これが最高に甘くておいしいのです。

我々はグルメですが料理はできません。料理ができるならいっそおかしい博士のままでもいいか、と思えるのです。博士は博士ですからね。

「ミミちゃん助手よ」

「むぐ、なんですか？　サンドスターの話ならもう飽きたのです。あれ以上は自分で調べるのです」

「……うむ」

がっかりした顔されても知らないものは知らないのです。

博士はよほどサンドスターに興味が湧いたらしくて何度も性質や由来のことを聞いてくるのですが、キラキラしててフレンズとセルリアンのもとになるくらいしか分からないのです。

そんなことよりおはぎ、おはぎです。今日のおはぎはとってもうまい。だからきっと、明日も、うまい。

――――

オオカミがやってきました。特に珍しいことではないのです。たまにふらりと現れては博士と難しいことを話して去っていくのがよくあります。

今日のおはぎをまだもらってないのですが、博士とオオカミは親子。二人が少し話す間くらいは待ちましょう。

「オオカミよ。儂はこのパークを巡る力を――サンドスターを手中にしようと思う」

「……ですが」

「分かっておる。第一の掟により、義父が命じる。フレンズを捨てよ」

「フレンズを、捨てる?」

「そうじゃ。今より貴様の守るべきはフレンズではない」

「……できませぬ」

「できぬ、だと?」

ざわ、と空気が変わるのを感じました。

どこか懐かしい、動物だったころの記憶。息を殺して獲物に飛びかかる直前のような、狩りの緊張感が周囲に――いえ、博士とオオカミの間に満ちます。

かと思うと、博士が悲しそうに泣き崩れちゃいました。いつもどおり変な話をしているかと思いましたが、ケンカになったようですね。これはいけません。

「フレンズが情に流されるなど……なんと情けないことか」
「そうです、情けないですよ！」
「ええい、引っ込んでおれ！」
なぜでしょう、博士の味方をしたのにあっちいけと言われました。もう勝手にしてください。図書館の二階まで羽ばたいて、そこから二人のやり取りを見下ろします。
「パークの掟を忘れたか？」
「掟は己で定める。そう決めました。この地に住まうフレンズのように」
えっ？
きいん、と高い音が響いたときには、博士がオオカミに飛びかかっていました。我々は梟なので音をたてずに動くことなんて朝飯前なのです。
そうじゃなくて。
オオカミが博士の爪を弾いていなかったら、きっと大怪我をしていたのです。もしかしてこれはケンカじゃなくて――
「ほう、腕は落ちておらぬようだな」
「……！」
「やろうか」
狩り、なのでしょうか。

一度距離をとった二人は、爪と牙を激しくぶつけ合います。お互いに弾き弾かれるたびにサンドスターの七色がきらめいて、図書館の周りだけサンドスターの雪が降っているようでした。

どうにかしないと。狩りごっことか、ヘラジカやライオンのやってる戦いごっこなんてレベルじゃありません。早く止めなきゃ大変なことになっちゃいます。

でもなぜか二人は嬉しそうに笑っているようにも見えて、本当に割って入っていいのか判断がつきません。

博士がひときわ大きく、オオカミの爪を弾き返しました。

「ひとぉつ！　パークの長は絶対！　我々に逆らうことは許されぬのです！　守れておらぬぞ！」

「初耳ですよ!?」

何勝手な掟作ってるのです博士!?

「ふたぁつ！　フレンズは絶対！　命を賭して守り、皆で仲良く暮らせ！　このままでは叶わんのですぅ……」

「その喋り方やめるのです、腹立つ！」

ねっとりなのです口調は勘弁なのです。

博士、上空に羽ばたいて私にも見えない速度でオオカミに突進しました。オオカミが

ふっ飛ばされて地面に転がります。

「みぃっつ！　恐怖は絶対！　一度の敗北はよい、だが手段を選ばず必ず復讐せよ。輪廻の果てに復讐、果たしてみせよう……」

倒れ込んだオオカミに走り寄る博士。

まずいのです。このままではどちらかが本当に――

二人に文句を言われても止めようと決断し、羽ばたいたそのとき。サンドスターが温泉のお湯みたいに、勢いよくふきだしました。

博士の体から。

「……え？」

オオカミの爪が、博士の背中から突き出ています。

オオカミは勢いよく爪を引き抜くと、博士の背後へぴょんと跳ねて、もう一度深く爪を突き入れました。え、ちょ、ええ？

「……今一度、影落とし。お返しいたす」

「見事、なのです……」

博士は倒れました。

私が博士のそばに着地したのはその直後。サンドスターの輝きが、博士の体からあふれて止まりません。抑えても抑えても溢れてくるのです。

約束が違いますよ、博士。
今日のおはぎはどうするのですか。誰が作ってくれるんですか。
そのうちおはぎの作り方を教えてくれると言ったじゃないですか。ちゃっかり漢字もカタカナも読めるようになってた癖に、読み方も教えないままですか。
勝手におかしくなって勝手にオオカミとケンカして、満足そうな笑顔を浮かべて、あんまりにも勝手すぎなのです。
だから――私も勝手にやってやるのです。
「オオカミ。あなた、愛想はまるでないですが……不思議と憎めないヤツでした」
オオカミはじっと私を見つめていました。
博士の体を横たえ、私は立ち上がります。
「セルリアンをたくさん倒して、フレンズを守ってくれた。ですが……今はあなたこそが、セルリアンなので――」
「うーん、うるさいですね」
決めゼリフくらい最後まで言わせてほしいのです。
血じゃなくてサンドスターが出てたり、普通に寝息を立ててたりしたので寝てるだけとは分かってたんですけど、もう少しタイミングがあると思うのです。って、この声は!?

「あれ、なんでこんなところで寝てたのです?」
「そんなことはどうでもいいのです！　博士、おはぎは!?」
「おはぎ?　なんですかそれ」
私は目の前が真っ暗になった気分でした。いえ、我々は真っ暗でも見えるんですけど。
博士の声はねっとりした渋いものから普通の博士のものへと変わり、博士の体よりも大きい三つ編みおさげも消えていました。さっき博士の体から出ていたように見えたサンドスターの正体は、斬られたおさげだったみたいです。
「おはぎ、おはぎ……」
「……」
今日の分のおはぎも、明日のおはぎもそのまた次のおはぎもなくなりました。
オオカミがぽんと肩を叩いて慰めてくれましたが、おはぎの代わりにはならないのです……。

その後、オオカミはハンターとしての活動に戻りました。オオカミに助けられたフレ

ンズは増えているらしく、パークのいろんなところに「忍⊠」のマーキングが刻まれています。もし文字が読めるフレンズが生まれたら、意味を聞いてみたいですね。
「助手、本当にこれで合っているのですか？」
「博士がこうしていたのです。少し待てばふっくらしているはずなのです」
「ふーん。おや、誰か来たみたいですね」
「新しいフレンズかもしれません。私はお米を見てるので、博士」
「しょうがないですねぇ」
　私は普通の博士といっしょに、おかしくなった博士のやり方をまねておはぎを作ろうとしています。まずはお米をたくところから。こんなに固い米粒でもふっくらになるんですから料理って不思議なものです。先は長いですが気長にやりましょう。
　博士おかしくなる事件のてんまつはこんな感じ。
　でも一つだけ気がかりなことがあって――
「ひとぉっ！」
　図書館の表から、博士の声が聞こえます。
「パークの長は絶対！　我々に逆らうことは許されぬ！」
「えぇー!?　めちゃくちゃだよー！」
「口ごたえするのですか？　守れておらぬのです……」

前よりもねっとりした言い方でした。博士は本当に元に戻ったんでしょうか？
まあどっちでもいいですね。
とにかくおはぎ、おはぎです。

巴流　かばん

かばんちゃんがおかしくなっちゃった。
「かばんちゃん、大丈夫!?」
「大事ない。先を急ぐぞ、猫の子よ」
「私はサーバルだよ！」
急に赤っぽい毛皮を脱いで、黒くて薄い毛皮だけになった。しかもずんずん歩いて木陰から出て行こうとしてる。待って、今の時間はきゅーけーしてなきゃ！
「葦名と日の本の行く末が気がかりだ。急がねばならぬ」
「急に何言い出すの!?　かばんちゃんが何のフレンズか調べるんでしょ？　あっ、待ってよー！」
暑い太陽もへっちゃらで歩いていっちゃう。
元気なのはいいことだけど、さっきまでおとなしい感じだったのに。一体何があったんだろ。

———

私はサーバルキャットのサーバル。さばんなちほーを縄張りにしてて、今日は見慣れないフレンズを見かけたから、狩りごっこで仲良くなった。
その子はかばんちゃんって言って、自分がなんのフレンズか調べに図書館に行きたいんだって。
さばんなちほーは暑いから、木の下できゅーけー！　かばんちゃんは全然ハアハアしてなくてすごかったなー！
でもかばんちゃんが変になったのはこのときだった。

かばんちゃんは、私が木に刻んどいたオオカミちゃんのマークをじっと見つめてた。
「かっこいいでしょ。オオカミちゃんの印だよ」
「オオカミ……」
「うん！　とっても強いハンターで――」
「ぬああっ！」
「うひゃあ!?」
急に大声出すから私びっくりしちゃったよ。

私が耳をふさいでたら、かばんちゃんは急に毛皮を脱ぎだして、薄くて黒いの一枚だけになっちゃった。それと声も、低くて迫力のある感じ。

あるき方ものしのししてて何だか頼もしいや。これならセルリアンに襲われてもへっちゃらだね！

あっ、そうだ、毛皮！

「何をしている！」

「へ？　かばんちゃんが涼しそーだから、私も脱ごっかなって」

毛皮が取れるなんて知らなかったよ。暑いさばんなちほーも脱いじゃえば楽々だね。

と思ったけど、かばんちゃんは私の手を抑えながら首を横に振った。ダメ？　なんで？

「獣といえど、女子（おなご）がみだりに肌を晒してはならぬ」

「おなごってなーに？」

「……メス、と言えば分かるか」

「そうなんだ！　うん分かった！　かばんちゃんは物知りだね！」

かばんちゃんは私のこと心配してくれてるみたい。それなら暑いけど我慢しよっかな。

私がうなずいたら、かばんちゃんは「行くぞ」って言ってまた歩いて行っちゃった。

待ってー！

――――――

かばんちゃんはちょっと張り切りすぎたみたい。少しずつ歩くのが遅くなってきて、木登りしたら「かはっ」って言いながら落ちちゃった。疲れたんだね。「忍びのようにはいかぬな」って？　忍びってなんだろう。

色々たいへんだったけど、水場に着いた。

水場は小さな丘の上にあるから景色がいい。きれいな景色を見ながら水を飲むと、生き返るよね！

「だーれー？」

「下がれサーバル！」

「あっ、カバ」

声がしたと思ったら、水場の中からカバが出てきた。かばんちゃんがびっくりしてる。

「サーバル、と見慣れない子ね。驚かせてごめんなさい」

「……フレンズか」

「ええ、カバですわ。あなたはサーバルのお友だち？」
　かばんちゃんの後ろから私も顔を出すよ。庇ってくれようとしたんだね。
「そうだよ、かばんちゃんって言うの！　なんのフレンズか分かんないから、図書館に行くんだ」
「いや、サーバル。書庫には、日ノ本への道筋を調べに行くのだ」
「えっ、そうなの!?」
　あれ？　てっきりフレンズのこと調べに行くのかと思ってた。私おっちょこちょいだから、勘違いしてたのかな。
「じゃああなた、自分が何のフレンズかもう分かってますの？　耳もしっぽもない変わった格好ですけど」
「無論。葦名弦一郎だ」
　ゲンイチロー。かばんちゃんはゲンイチローのフレンズなんだ。ゲンイチローってどんなフレンズなんだろう？
　カバも気になったみたいで、首を傾げてる。
「ゲンイチローはどんな動物ですの？」
「葦名流と巴流、ともに免許皆伝を受けている」
　あしな？　ともえ？　よく分かんないや！

「それって何ができるんですの？」
「何が、だと？」
「そうですわね、例えば……空は飛べるんですの？」
「いや」
「じゃあ足が速いとか？」
「いや」
「泳ぎが得意だったり？」
「いや……」
「あなた何にもできないのね」
「結局、俺は何も出来ないのか……」
　わわ、かばんちゃんが落ち込んじゃった。
　大丈夫、きっと何か他に得意なことがあるんだよ。かばんちゃんは優しくてがんばり屋さんだから、ゲンイチローもきっとがんばるのが得意な動物だと思うな。
「かたじけない、サーバルどの……」
「へーきへーき！」
「まあ、サーバルみたく鼻も耳もいいのに、おっちょこちょいで全部台無しにしてる子もいることですし、気にすることないですわ」

「ひどいよー！」
　もうカバったら、今度は私が落ち込みそうだよ！
「いい、かばん。力は絶対。誰かを恃むのは良い、だが最後に恃めるは己の力のみ。それがパークの掟。サーバル任せじゃダメよ？」
「承知した」
「そんな掟あったっけ？」
　もっと分かりやすくて言いやすい掟だった気がするけど、かばんちゃんが分かってるみたいだしいいや。かばんちゃんは賢いな。
　私たちはカバと別れて、先に進んだ。

　アードウルフちゃん!?
「どうした、サーバルどの」
「誰か困ってるのかも！　急ごう！」
「ま、待て」
　水場を離れてしばらく経ち、目印の平たいやつを通り過ぎてあと少しで隣のちほーへ

のゲートが見えてくるとき、悲鳴が聞こえた。アードウルフちゃんの声だ。
あまりお話したことはないけど、セルリアンに襲われてたらたいへん。助けなきゃ！
急いで声の方向に向かうと、ゲートが見えてきた。アードウルフちゃんは――あれっ？
「あああありがとうございました……」
「……良い」
「そ、そうですか」
「……」
「……し、失礼しますっ！」
セルリアンの姿はなくて、ぺこぺこ頭を下げてるアードウルフちゃんと、もう一人。じーっとアードウルフちゃんを見つめてるオオカミちゃんの姿が見えた。
お礼言ってるし、オオカミちゃんがアードウルフちゃんを助けたのかも。よかったー。
でもオオカミちゃんのガン見が怖かったのかな、アードウルフちゃんはすごいスピードでさばんなの方へ走って行っちゃった。オオカミちゃん、いい子だけどにらめっこすると怖いんだ。
橋の上にポツンと残されたオオカミちゃんは寂しそうだった。

「おーい、オオカミちゃん！」
「サーバルどの……」
「またセルリアン退治してるの？　いつもありがとー！」
「いや……」
　オオカミちゃんみたいなハンターがいるから、戦うのが苦手な子も安心して暮らせるんだ。たとえばさっきのアードウルフちゃんとか、今日お友だちになったかばんちゃんとか――
「はあっ！」
「……！」
「ええっ!?」
　またかばんちゃんがおかしくなった！
　私の横を通り抜けてオオカミちゃんに殴りかかっちゃったよ!?　オオカミちゃんは後ろに跳んで避けたけどびっくりしたみたい。
「再び見えようとはな、御子の……いや、オオカミよ」
「貴様……」
「六道を巡り、畜生に堕ちたとみえる」
「畜生ではない。フレンズだ」

かばんちゃんは拳、オオカミちゃんは爪を構えてにらみ合う。
「巴流、かばん。参る」
「……来い」
「二人ともすとーっぷ！」
なんかケンカになりそうだから間に入って止めるよ。初対面なのに仲悪過ぎない？
なんで？
「ケンカはダメ！　二人ともどうしちゃったの!?」
「む……」
「ふむ……平穏なパークを、我らの血で汚すこともあるまい」
二人とも分かってくれた。お互いの爪と拳を下げて、あっ、オオカミちゃんは背中を向けて走り去ろうとしてる。仲悪いから仕方ないけど、もうちょっとお話したかったな

「すきありっ！」
「ぬっ！」
「ほう、同じ轍は踏まぬか」
「かばんちゃん!?」
かばんちゃんがオオカミちゃんの背中にまた飛びかかった。そのまま激しく爪と拳

をぶつけあう大ゲンカが始まっちゃったよ！　なんで!?
「己の仇すら討てずして何が武士か！　卑怯とは言うまいな、オオカミぃ！」
「戯れ言を……！」
かばんちゃんの言ってることは全然分からないけど、二人は通じ合ってるみたい。もう割り込める雰囲気じゃないや。
かばんちゃんの拳と足がオオカミちゃんに振るわれるけど、全部爪で弾かれてる。弾くたびに飛び散るサンドスターがキラキラしてきれい。オオカミちゃんとこんなにケンカできるなんて、ゲンイチローはすごく強い動物だったんだろうなあ。
離れたところに座ってケンカを眺めてたら結構な時間が過ぎた。いつの間にか太陽が黒い雲に隠れてるよ。
なんだか全身の毛がピリピリして落ち着かない。もしかして雷雲かな？　ジャングルちほーのフレンズから聞いたことあるけど、黒い空から降ってくる光を雷っていうんだって。
空を見てたら、かばんちゃんが大きく跳び上がったのが見えた。
「刀がなければ雷返しは叶うまい！　巴の雷、今こそ受けてみよ！」
そういえば、雷は背の高いものに落ちるって聞いた。例えば木とか。
かばんちゃんは普通の木より高いところまで跳んでるけど――

「危な――」
い、って叫ぶ暇もなく。
空から落ちてきた雷が、かばんちゃんを飲み込む。目の前が真っ白になって、耳もきーんとして聞こえないけど、それでケンカは終わったみたいだった。

――

「っていうことがあったんだよ！」
「そうなんだ。暑さでおかしくなったのかな……心配かけてごめんね」
「気にしないで！」
その日の夜、ジャングルちほーに少し入ったところで、私はかばんちゃんとお話してる。
かばんちゃんは木の下から雷に打たれて黒焦げになるまで覚えてないみたい。物腰も最初にあったときと同じ感じに戻った。
オオカミちゃんはケンカの後、片手を胸の前で立てながら「なむ」ってつぶやいてどこかへ行っちゃった。相変わらず無口なんだから。
「オオカミさんにも謝りたいな」

「オオカミちゃんはいろんなちほーを回ってるから、きっとまた会えるよ。そのときは仲良くしようね！」
「そうだね、サーバルちゃん」
　毛皮がボロボロになって寒そうだけど、かばんちゃんは元気そう。雷って見た目は怖いけど、当たってもそんなに痛くないんだね。
「ところでかばんちゃん、その背中と腰にあるのは何？」
　そうだ、もう一つ気になることがあった。
　ジャングルちほーに入ってすぐ、かばんちゃんは太い木の枝を腰にさして、もう一本よくしなる枝と細いツタを合わせて何かを作った。
「これ？　これは刀と弓だよ」
「カタナ、ユミ？」
「うん、これがあればオオカミちゃんにも勝てると思う。俺は奴を倒すためなら、どのような異端の力でも利用してみせる……！」
「あー！　またおかしくなってるよ！」
「えっ、僕何か変なこと言った？」
「言ったよー、あははは！」
　ときどき声が低く、目つきが鋭くなるかばんちゃん。でもどっちのかばんちゃんもか

ばんちゃんだから、なんでもいいや。一人の体に二人が入ってるみたいで、なんだかおかしいな。

　私が笑ってると、かばんちゃんはちょっと不安げに、

「僕、ゲンイチローのフレンズなんだよね？　どんな動物なのかな？」

「分かんないや！」

「ええ……」

「でも、きっと優しくて強い素敵なけものだよ！」

「そ、そうかな」

　かばんちゃんは不思議なけもの、ゲンイチローのフレンズ。どんなけものかは図書館で聞いてみるまで分かんないけど、私は絶対、素敵なけものだと思うな！

　そう言うと、かばんちゃんはちょっと元気になって、笑った。私もつられて笑ってるうちに夜が更けて、一日が終わる。

　明日はどんな日になるのかな。

侍大将　ヘラジカ

かばんちゃんと図書館目指して出発したら、いろいろなちほー、フレンズと出会った。じゃんぐるちほーのカワウソ、ジャガー、こうざんのトキ、アルパカ、さばくちほー、みずべちほー――今いるちほーも初めて見る場所で、なんだかへんな感じ。

「変わったところだねー」

「黙って歩け」

アラビアオリックスに怒られちゃった。かばんちゃんは怖いのかな、さっきから黙り込んでる。

私たちはジャパリバスに乗ってへいげんちほーまでやってきたんだけど、大きな岩にぶつかってバスがストップ。そしたら急にアラビアオリックスとオーロックスが現れて、私たちが「怪しいやつ」だから偉いフレンズに見てもらうんだって。うーん、よく分かんないや。

「……懐かしい場所だ。葦名の城を思い出す」

「かばんちゃん、この場所知ってるの？」

「ああ。まさかパークにこのような場所があるとはな」

かばんちゃんは物知りだなあ。今歩いてるこの建物、お城っていうんだ。
しばらく歩いてると、かばんちゃんが「天守」って呼ぶ場所についた。オーロックスたちが「ふすま」の前にひざをついてるよ。
「ご当主様。曲者どもを連れて参りました」
「入れ」
二人が開けてくれたふすまを通って、私とかばんちゃんも中に入る。中の暗いところにフレンズが一人立ってて、うわぁ、ものすごい目つきで私たちをにらみつけてる。目が狩りの直前みたいにギラギラして爪はサンドスターで輝いちゃってるよ。落ち着いて！
「ネズミが紛れ込んだか。斬る前に、名を聞いてやる。名乗れいっ！」
「ネズミじゃなくてサーバルだよ！　こっちはかばんちゃん！」
「お祖父様……!?」
かばんちゃんがすごく驚いてる。もしかしてオオカミちゃんみたいな知り合いなのかな。
怖いフレンズもかばんちゃんと見つめ合って、サンドスターのきらきらが収まった。
「儂に孫はおらぬ。じゃが……どこか懐かしい。不思議なこともあるものよ。カカッ、気に入った！　オーロックス、アラビアオリックス」

「はっ！」
「大儀であった。下がれ」
「ははー！」
　二人が出ていくと私、かばんちゃん、怖いフレンズの三匹が残される。
　すると怖いフレンズちゃんがごろっと「たたみ」に転がって、「いやー疲れた疲れた」って言い出した。えっ？
「君たちも楽にしなよ。プライドの手前、部下にはリーダーっぽくしなくっちゃでさ。あ、私はライオン、よろしく」
「よ、よろしく」
「……よろしく頼む」
　言われたとおり足を崩すけど、ライオンはそれ以上に崩れてた。部下の前だからって頑張りすぎだよ。声まで全然違うもん。でも張り切ると声と雰囲気が迫力ある感じになるのはかばんちゃんと似てるね。
「そっちのかばんちゃんだっけ？　悪いけど君に覚えはないなぁ。動物のころも孫はいなかったしね」
「はい、すみません。僕の気のせいでした」
「いやー怖がらせちゃってごめんね。来週合戦でさ、みんなピリピリしてるんだ」

「合戦!?　敵方は内府でしょうか!?」
「そんなわけなかろう」
　かばんちゃんとライオンは雰囲気がコロコロ変わってすごいや。まるで一つの体にもう一匹フレンズが入ってるみたい。
　ライオンによると、へいげんちほーはヘラジカとライオンの二つのグループで何回も縄張り争いをしてるみたい。五一回も戦って全勝してるなら辞めなくていいと思うけど、ケガをする前にライオンは辞めさせたいんだって。
　どうすればいいかな。
　こんなとき、かばんちゃんはいつもいいことを思いつく。じゃんぐるちほーの橋とか、めいろで道を見つけたりとか。きっと今回もいいことを――
「承知しました。このかばん、ヘラジカの衆を討ち滅ぼして参ります」
「かばんちゃん!?」
「たわけが！」
　めちゃくちゃなことを言い出したかばんちゃんだけど、私とライオンの声で起きたみたい。ハッとしてから、
「じゃなくて、もっと安全なルールで戦うのはどうでしょう」
　って言い直した。

うんうん、やっぱりこっちがかばんちゃんだよね。ゲンイチローを野生開放してるかばんちゃんもかっこよくて好きだけど、普通のかばんちゃんのほうが似合ってる気がするな。

かばんちゃんの考えたルールはとっても安全で、これならライオンとヘラジカが戦っても大丈夫。かばんちゃんはすっごいなー！

紙を巻き付けた木の棒を武器にして、体のどこかにくっつけた風船を潰し合う。それがかばんちゃんの考えたルールだった。これなら棒で叩かれても痛くないし、勝ち負けもわかりやすい。

『ヘラジカには私の古い友だちが世話になってるんだ。くれぐれも穏便に頼むよ』

って念押しされてから、私たちはヘラジカのところに向かった。

お城から少し離れたところにいるヘラジカたちの縄張りでルールを説明したら、みんななんだかんだで受け入れてくれたよ。

ヘラジカが武器の棒をかざして声を張り上げてる。

「よいか皆の衆！　来たるはへいげんちほー存亡の戦！　パークのため、フレンズのた

め、共に命を捨てて参ろうぞ！」
「ええ!?　命は捨てたらダメでしょ！」
「おっと、そうだったな」
　もう、ヘラジカったら気合入り過ぎだよ。
「じゃあ改めて。みんな、武器は変わっても戦いに変わりはない。今度こそ、勝つぞー！」
「おおー！」
　アルマジロ、ヤマアラシ、シロサイ、カメレオン。ヘラジカの仲間たちもみんな張り切ってるけど、張り切りすぎないか心配だな。落ち着いてるのはハシビロコウが一人だけ。でもあの子かばんちゃんをじーっとガン見しててちょっと怖い。
「そうだみんな。アイツはまた引きこもってるのか？」
「そうでござる。『どんな形であれ、戦は好まぬ』らしいでござる」
「うーむ、好きじゃないなら仕方ないな！」
「ねえ何の話？」
　ハシビロコウの視線が怖くてヘラジカたちの話にまぜてもらった。ここにいる他にもう一人ヘラジカの仲間がいるらしいけど、その子は戦いが嫌いでずっと竹林の奥にこもってるんだって。好きじゃないことを無理してやることはないよね。

そんなこんなで私とかばんちゃんも自己紹介して仲間に入れてもらった。かばんちゃんは賢いから、ヘラジカに勝ち方を教えてライオンに勝たせる。それで縄張り争いを終わらせる作戦だよ。

いきなり本番を始めるのも急ってことで、棒を使った練習試合をすることになった。

ヘラジカ対アルマジロ。ヘラジカすごーい！　アルマジロが吹っ飛んじゃった。

私対シロサイ。サイの迫力すごーい！　でも走り回って疲れたところを叩いて私が勝ち。やった！

かばんちゃん対カメレオン。

「貴様、その構えは!?」

「……」

舞台に上がったかばんちゃんは、カメレオンの構えを見てびっくりしてる。確かに不思議な構え方だなあ。頭の横で棒を構えて、先っちょは前に向けてる。持ちにくそうだけど手慣れてて自然な感じ。

「オオカミゆかりの者か」

「……明かせぬ。師から口外無用と言われているゆえ」

「なるほど」

普通に言っちゃってるけど、カメレオンはオオカミちゃんの弟子みたい。言われてみ

れば雰囲気が似てるかも。

かばんちゃんとオオカミちゃんは仲悪いから、かばんちゃんが怖い顔でやる気になってる。ケガさせちゃダメだよ。背中の弓も使っちゃダメ。ライオンに念押しされたでしょ。

ヤマアラシの合図で試合が始まった。

そのとたん、カメレオンが腰のあたりから何かを取り出して口元に――

「ぐびっ」

「ぬあっ！」

それを見たかばんちゃんが飛びかかって棒を突き出すけど、カメレオンちゃんが棒を踏みつけて抑え込む。かばんちゃんは慌てて後ろに下がった。

「ぐびっ」

「ぬああ!?　体が勝手に！」

「かばんちゃーん!?」

かばんちゃんが突いて見切られてを繰り返す。

そういえばかばんちゃん、前に言ってたもんね。『いいサーバルちゃん？　僕は神聖な立ち合いのさなかに飲み食いする輩が許せないんだ。特にひょうたんは絶対ダメ』って。

体が勝手に飛びかかるくらい許せないなんて、きっと動物の頃ひょうたんのせいでひどい目にあったんだろうなあ。

そんな風に思ってると、カメレオンがいっそう強く棒を見切り、踏みつける。どん、と低い音がして、かばんちゃんが体勢を崩す。その間にかばんちゃんの風船を割って、カメレオンが勝った。

「ふふん、かばんどのの倒し方は師匠から聞いていたでござる」

「くそっ、汚いぞ！」

「忍びは汚いものにござる。今の拙者、とっても忍びっぽいでござる」

「やるじゃないかカメレオン！」

ヘラジカたちがカメレオンをほめる横で、かばんちゃんは四つん這いになって落ち込んでる。ヘラジカもすぐに「かばんの突進？　もすごかったぞ！」ってほめてくれたけど、元気になるにはしばらくかかりそう。

でもひょうたんを許せない動物なんて変わってるな。ゲンイチローがどんな動物なのか、ますます気になってきちゃった。早く縄張り争いを終わらせて、図書館に聞きに行かなくっちゃ！

「見るでござる！　師匠直伝、月隠の術！」
「消えた!?」
「いや、声がするから分かるぞ。そこだ！」
お城の表の方から合戦の音が聞こえる。「忍びの技があればアラビアオリックスたちも怖くないでござる！」って言ってたカメレオンがやられて、今はシロサイ、ヤマアラシ、アルマジロ、ハシビロコウの四人で頑張ってるみたい。
私、かばんちゃん、ヘラジカの三人はお城の裏手からこっそり中に忍び込んだ。表で目立ってる間にこっそり忍び込むのがかばんちゃんの作戦なんだ。
「大丈夫かな……」
「かばんの作戦は完璧だ。みなを信じよう！」
「そうそう、心配ないよ！　あ、みんな止まって！」
お城の中はよく音が響く。ちょっと遠いところから足音が聞こえた。私は耳がいいんだ。
そっと「いしがき」の角から覗き込むと、二人のフレンズがうろうろしてるのが見えた。きっと門番だ。一人は見たことないけど、もう一人はけいばじょうで見かけたくろげによく似てる。馬のフレンズかな。

ライオンのところに行くには回り道しなきゃいけないと思ったけど、前のめりになりすぎて私は陰から出ちゃった。二人のフレンズがじっとこっちを見てる。

逃げなきゃ――そう思ったとき、

「我、鬼庭刑部雅孝様（My naaame is Onikage,）が誇る名馬、鬼鹿毛なり！（Master Gyobu Masataka Oniwa's Great Horse!）

この鬼鹿毛がいるかぎり、大手門は通さぬ！」（As I breathe, you will not pass the Castle Gate!）

ふみゃー!?　うるさーい！　耳ふさいでもきーんてするよ!?

え、なんかヘラジカまで出てきた。「おお、なんと威勢のいい。私も負けてられないな」って――

「やあやあ私はヘラジカだ！　へいげんを縄張りとするヘラジカ衆、その頭領とは私のことよ！　いざ尋常に勝負！」

ふみゃ〜!!?

「ヘラジカさん、目的が違ってます！」

「なんでだ、勝負しよう!?」

「まてー！」

かばんちゃんに手を引かれ、逃げ出す。

だけど私はもうこれまでみたい。お茶を飲む前のトキの五倍くらいのショックで目が回ってるもん。

「サーバルちゃん!?」
「かばんちゃん……私の、分まで、がんばっ、て……ガクッ」
　耳がいいのっていいことばかりじゃないんだね。かばんちゃんといっしょだといろんな発見があって楽しいな――

――

　目が覚めたのはお城の表の草の上だった。
　ヘラジカとライオンの戦いは終わったみたいで、どっちのグループのフレンズもみんないっしょにわいわい集まってお話してる。
「ふああ、おはよー」
「サーバルちゃん、大丈夫!?」
「へーきへーき。私がんじょうだから!」
　かばんちゃんの声をきっかけにみんなが集まってきた。みんな心配そうで、ヘラジカと鬼鹿毛は「すまなかった!」ってまた大声で謝ってくれたけど、大丈夫。ちょっとびっくりしただけだもん。
「かばんちゃん、あの後どうなった?」

「天守でおじい……ライオンさんとヘラジカさんが戦って引き分けになったよ。すごい戦いだった」
「そうなんだ。って、あれ!?　天守に穴が空いてるよ!」
「うん、そのくらいすごかったんだ」
　お城のてっぺんにある天守には大きな穴があいてた。よく目をこらしてみると、穴の縁が焼けたみたいに真っ黒になってたり、壁の一部が鋭い爪で斬られたみたいに両断されてたりするのが見える。ヘラジカもライオンも強いフレンズだから、お互い風船を割るのも大変だったみたい。私も見てみたかったなー。
　ライオンは縄張り争いが終わって満足、ヘラジカもライオンと戦えて満足してる。
　次の勝負のルールをかばんちゃんが考えだしたとき、新しいフレンズが一人、へいげんの方からやってきた。
「フン。戦、戦と騒いで何をしておるのかと思えば……」
「おお、猩々!」
「オランウータン!　ん?　ライオン、ショウジョウってなんだ?」
「あ、気にしないで」
　茶色っぽいモコモコした毛皮のその子はオランウータンっていうらしい。左腕がないのはケガでもしたのかな?　ちょっと目つきがオオカミちゃんに似てて、緑色の耳飾

りがきれい。竹林の奥にこもってたのはこの子だったんだね。
「誰も死なぬどころか血さえ流れぬ。これでは炎が翳るわけだ」
「??　ねえ、それは何持ってるの？」
「オオカミの手土産じゃ」
「ぬあ！」
「おっと」
　オランウータンが手に持ってるもの、とっても大きなひょうたんを掲げたら、またかばんちゃんが跳びかかった。危ないと思ったけど、棒を踏みつけたから安心。
「サンドスターを醸したもんらしい。争いが一段落したなら、一つどうだ」
「そりゃあいい！　みんなでいっちょ宴といこう！」
「おお、よく分からんが分かった！　みんなで騒ぐぞー！」
　おおー、と声をあげるみんなといっしょに私も声をあげる。ライオン以外誰も分かってないみたいだけど、オランウータンは縄張り争いが終わったお祝いに、おいしいものを振る舞ってくれるみたいだね。ほらかばんちゃんも、ひょうたんをにらみつけてないで騒ごうよ！
　たーのしー！

ぬしの白蛇

図書館への一本道をまっすぐ進む。ぐねぐね曲がった木がトンネルになってて、木の隙間から差し込むおひさまの光がとってもきれいだねー。

ゆっくり歩く私、フェネックがじれったくなったのかな、前を歩くアライさんとシロヘビさんが振り返って足を止めたよ。

「フェネック、そんなにゆっくりしてると帽子泥棒が逃げちゃうのだ！」

「それだけじゃないぞ。にっくきオオカミもこのままでは逃げおおせよう」

「そうなのだ。帽子泥棒とオオカミさんを早く見つけて成敗しないと、パークの危機なのだ！」

「まあまあ、気楽にいこうよ。道のりは長いよ？」

先を急ぐ二人にそうは言ったけど、道のりはたぶんそれほど長くない。私、アライさん、シロヘビさんの三人で旅を始めたのはさばんなちほーで、さっきへいげんちほーを通ったところだから、パークをぐるっと半周してる。今は折返し地点だねー。

私が追いつくと二人はすぐに急ぎ足で歩いて行っちゃった。焦るのは分かるけど、もうちょっとゆっくり行こうよー。

アライさんは帽子泥棒を追いかけてる。こないだの噴火の日、アライさんが先に見つけた帽子を知らないフレンズさんが勝手に持ってっちゃったんだ。アライさんはその泥棒さんを捕まえるために急いでるってわけさ。私はなんとなく面白そうだから、アライさんに付き合ってる。

で、アライさんと旅を初めてちょっとしたころ、シロヘビさんに会った。シロヘビさんは少し変わったフレンズなんだ。

たとえば見た目。全体的に真っ白な毛皮なんだけど、他の蛇のフレンズさんが着てるパーカーとフードとは全然違う。フードの部分は綿帽子、パーカーの部分は死装束っていうのを着てる。毛皮のことを教えてくれたオランウータンさんは「嫁に行くのか黄泉に行くのか。よく分からん格好よな」って首をかしげてた。すごくきれいだけどやっぱり変わった格好なんだねー。

でも一番変わってるのは――なんて、つらつら考えながらゆっくり歩いてく。

アライさんもシロヘビさんも、もっとのんびり行こうよー。私なんか特に意味もなく昔を振り返っちゃうよー。

――――

「そこな童(わらべ)よ。オオカミを知らぬか？」

最初、夜のさばんなちほーでそんな風に声をかけられたんだったねー。シロヘビさんは今まで見たことないほど真っ白で、しかも不思議な貫禄があった。だから私もアライさんも一瞬ぼーっとその姿を見つめてたんだ。

首を傾げたシロヘビさんにもう一度声をかけられ、自己紹介。

オオカミさんのことはもちろん知ってた。パークでも有名なハンターさんだから。でもあの子はパーク中を駆け回ってセルリアン退治をしてるから、どこにいるかは分からない。そう答えるとシロヘビさんはがっくり肩を落とした。

「なんでオオカミさんを探してるのだ？」

私も気になったことをアライさんが聞いてくれた。

もしかしてこの子もアライさんみたいに帽子とか、何かをとられた恨みがあるのかな

「動物のころオオカミに狩られた」

「えっ」

「あらら、それはたいへん」

物じゃなくて命をとられたんだねー。アライさんは絶句してる。

「あやつ、儂が寝ておるのをいいことに頭を何度もぐりぐりと……」

私はあんまり覚えてないけど、動物の頃は生きるために結構必死だからねー。オオカミさんも痛そうな狩りをしてたんだ。シロヘビさんが恨むのも無理はないかな。
「だがそれは良いのだ。弱肉強食は自然の摂理。狩られた儂の方が弱かっただけのことよ」
「え、良いのか!?」
「シロヘビさんは心が広いんだねー」
思いのほかシロヘビさんは寛大だったよ。
でも、恨んでるわけでもないならどうしてオオカミさんを探してるんだろう。そう聞くと、シロヘビさんは難しい顔でしばらく考えこむ。
「恨みではなく、無念というべきか」
「むねん?」
「うむ。数百年の長きにわたり儂のそばにいてくれた、伴侶がおった。そやつに子種を残してやれずただ死んでしもうたことが、無念でならぬ」
「なるほどー」
数百年もいっしょにいてそういうことをしないあたり、すごく気の長い動物さんだったんだね。でもそういうことをする前にオオカミさんに狩られちゃって、そのことが残念。だからオオカミさんに当たりたいわけかー。

蛇さんのはすごいんだ。いっぺん始めると二、三日は合体したまま、ずーっとどったんばったんしてるからねー。他の動物と比べてもじょーねつてきな分、オオカミさんへの思いも強いんだろうな。

「逆恨みとは分かっておるが、フレンズになってからというもの、特にすることがない。オオカミのヤツをひっぱたいて長年の無念を晴らそうと思うてな」

「ひっぱたいちゃうのかー。仕方ないかもだけど、私はお話して仲直りできれば一番だと思うけどなー。ねえアライさん？　……アライさん？」

アライさんは俯いて肩を震わせてた。刺激の強い話だったから、ショックを受けちゃったのかな？

心配になって顔をのぞきこもうとすると、アライさんは急に声色を変えて、シロヘビさんの肩に手を置いた。

「分かるぜ、嬢ちゃん」

「え、誰？」

シロヘビさんと声がはもった。アライさん、いきなり雰囲気が変わってどうしたんだろう。

「好いた相手とガキこさえるのはオスの本分。それをできなくされたとあっちゃあ、黙っていられねえわな」

「あ、ああ……」
「この『黒笠のアライさん』に任せな。オオカミのとこまで連れてってやるよ」
「まことか!?」
「男に二言はねえ。俺たちも今、笠泥棒を追ってんだ。俺たちでパークの巨悪を成敗といこうじゃねえか」
「委細承知！」
「がってんだー」
トントン拍子で流れていく話には正直ついていけなかったけど、とりあえず乗っておいたよ。だっていつになくアライさんが頼もしいんだもん。帽子が笠になってたり変なあだ名ついてたりすることは忘れて、便乗した方が楽しそう。
私たち三人の旅は、こんな風に始まったよ。

頼もしいモードのアライさんは結局長続きしなくて、じゃんぐるちほーでは川に流され、こうざんでは崖上りで疲れ、さばくちほーの迷路では迷い。あさっての方向に全力疾走するいつものアライさんだったねー。

今度アライさんが頼もしくなるのはいつになるのかな。
「着いたのだ！」
「建物に穴が空いてるが、大丈夫か？」
「たぶん、大丈夫だよー」
考えているうちに図書館に着いた。シロヘビさんの言う通り、普通の建物に穴が空いたような見た目だけど、きっと平気だよ。へいげんちほーのお城にも穴が空いてたし。
へんげんのフレンズさんは、帽子の子は図書館に向かったと言ってた。もしいなくても、ものしりな博士たちが帽子の子だけじゃなくてオオカミさんの居場所のことも何か知ってるかも。ってことを期待しつつ、私たちは前へ進むよ。
「伏せろ！」
がきいん、と高い音。次にサンドスターの輝きが見える。
振り返ってみると、宙に浮いた博士の足をアライさんが受け止めてた。後ろから飛んできた博士が蹴りかかってきたみたい。全然音がしなかったのはさすがの博士って感じだけど、アライさんがきちんと反応して防いだのはすごいねー。
博士は一度距離をとってから着地、遅れてミミちゃん助手もやってきて、二人いっしょにふんぞり返る。
「我々はフクロウなので」

「音をたてずに飛ぶなど朝飯前なのです」
「それ自慢したかっただけ？」
　博士と助手は顔ごと目を背けた。もう、いきなり狩りごっこは心臓に悪いよ。シロヘビさんもびっくりして――あれ、頭をかかえてしゃがみこんでる。
「シロヘビさん？」
「はっ!?　いや、なぜかそこな鳥の不意打ちにオオカミの面影を感じてな。と、トラウマが……」
「大丈夫なのだ！　アライさんが守ってやるのだ！」
「そうだよー、普段のアライさんはともかく、いざってときのアライさんは頼りになるからね」
　アライさんが「うんうん、その通り……ん？」と微妙に納得いってないのはおいといて、話を進めるよー。
　私たちは帽子泥棒の子を追ってる。ついでにサンドスターの吹き出る山に何かが埋まってるらしいから、そのことも聞いておく。ふんふん、雪山の方に向かったと。山は基本立ち入り禁止と。
　シロヘビさんのオオカミさんのこともちろん聞く。最近働きすぎだからお休みを申し付けた？　ペパプライブ、温泉、ロッジを巡る休暇の旅。へー、楽しそう。

ひとまず雪山に向かえば良さそうだね。シロヘビさんも怖がってるし、早くここを離れようかな。
「待つのです!」
お礼を言ってさっさと行こうとすると、博士に呼び止められた。シロヘビさんは怖いのか、私とアライさんの後ろにさっと隠れる。
「シロヘビ。その子を怖がらせたお詫びです」
「これ、ひょうたん?」
「何が入ってるのだ?」
おもむろに渡されたひょうたんを振ってみると、ちゃぷちゃぷ音がする。蓋を開けて匂いをかいでみれば、不思議な匂いがした。
「それはお酒です」
「おさけ?」
「それの味を説明するのに言葉はいりません、飲めば分かるのです」
「まさかお米にサンドスターを入れるだけでこんなに美味しくなるとは。僥倖でしたね、博士」
「りょうりはかばんしかできませんが、お酒造りならかんたんです。これで充実のよいどれ生活なのですよ、助手」

よく分かんないけど、いいものをもらっちゃったみたいだねー。匂いを嗅ぎつけたシロヘビさんが目をキラキラさせてるよ。

みんなでひょうたんに注目してると、博士たちのつぶやきが聞こえた。

「それにしてもシロヘビ、前に会ったときはここまで小心者ではなかったのですが……」

「何か怖い目にでも遭ったのかもしれません。驚かせるのは控えましょう、博士」

あれ？　シロヘビさんはつい最近の噴火でさばんなちほーに生まれたはず。博士たちと会うのは今日が初めてのはずだけどなー。似たフレンズさんと勘違いしてるのかも。

博士たちの勘違いはまあいいとして、お酒、お酒。

旅の道中、のんびり回し飲みしながらいこっか。次のちほーへれっつごー。

――――

『お酒くさっ！　なんですかあなたたち！　ファンとして最低限のマナーも守れないようじゃ、会場には入れませんよ！』

――――

お酒って怖いねー。たくさん飲むと気持ちよくなるけど、気持ちよくなった分記憶が飛ぶんだ。図書館を出てお酒を一口飲んだ後の記憶がないや。気がついたら毛皮を脱いだすっぽんぽんの姿で、ゆきやまちほーの温泉に浸かってた。

頭がぼけーっとしてまだお酒が抜けきってない。周りを見てみると、右となりにアライさん、左となりにシロヘビさん、正面に初対面のフレンズさんが二人、温泉に浸かってた。少し遠くの方には雪で真っ白に染まった山が見える。

「フェネック？　起きたのか？」

「アライさん……んー、まだぼーっとしてるけどねー」

「初めてのくせに飲みすぎだ。ちなみにどこまで覚えてる？」

「ペパプライブの会場で出禁されたとこは、ちょっとだけ。後はほとんど覚えてないや」

「まったく。ほどほどにな」

心配してくれるアライさんとは違って、シロヘビさんは呆れ顔だった。その手にはひょうたんと小さな入れ物を持って、ちびちび飲んでる。いいなあ、私も一杯——

「こら、フェネックはお酒を抜くのだ！　シロヘビさんも、飲むなら少し離れるのだ」

アライさんに言われてお酒さんが持ってるシロヘビさんが離れていっちゃう。ああ、お酒さん。

――お酒って怖いな、ちょっと飲んだだけなのにお酒のことしか考えられない。さすがに自分でも怖くなってきたよ。別のことで気を紛らわせなきゃ。

シロヘビさんが正面にいる二人のフレンズさんとお話してる。これを盗み聞きして飲みたい気持ちをごまかそう。

話を聞いてると、二人のフレンズさんはそれぞれカピバラさんとシシザルさんと言うことが分かった。寒いのが苦手だからずっと温泉にこもってるんだって。

「と、そういうわけだから、儂はオオカミをひっぱたかなければならんのだ」

「ひっぱたくのは痛いよよよ……」

「気持ちは分かるぞ。番（つがい）と別れる悲しみは言葉にできん。一発殴るくらいはしなければな」

「分かってくれるか、シシザル！」

シロヘビさんとシシザルさんは意気投合してる。この二人といいアライさんといい、動物のころはずいぶん世知辛い思いをしてきたんだねー。番や伴侶と呼べるくらい仲の良い子と離れ離れになるのは、きっと辛い。もし誰かのせいで私とアライさんが別れることになったら、その誰かを恨むと思う。

考え込んでいると、シシザルさんが鼻息を荒くする。

「あの仏頂面も業が深い。ヤツがここに来たときにオレが殴っておくべきだったか」

「オオカミがここに来たのか!?」
「ああ。次はロッジに泊まってゆっくりすると言っていた」
そういえばオオカミさんは休暇の旅を楽しんでるって博士たちが言ってたねー。ペパプのライブを楽しんで、温泉に浸かって、満喫しているところにシロヘビさんのビンタが飛んでくるのはかわいそう。
でも帽子の子もそっちに向かったらしいし、行かないわけにはいかないね。
温泉でいい気分になった私たちは、温泉といっしょに建ってる「りょかん」でお酒がぬけるまでぐうたらして、ロッジに向けて出発したよー。

ロッジには何事もなく着いた。途中で私が切れたお酒を補充するために図書館に戻ろうと言い出してひと悶着あったけれど、まあ大したことじゃないよねー。目の前では大きなロッジが、西から差し込むオレンジの木漏れ日で照らされてる。
「大きなところだねー」
「大きすぎなのだ！」
「うむむ、これではオオカミを探し出すのも一苦労だぞ」

大きな木に寄り添うみたいに建てられたたくさんの小屋が、木の橋でつながってる。小屋自体はそこまで大きくないけど、数が多いから探すのは大変だね。

三人まとまって探してるうちに逃げられるかもしれないから、手分けして急いで探すことになったよ。私は急ぐの性にあわないから、普通に探すけどねー。

アライさんとシロヘビさんが左右に散って、正面玄関っぽいところから私が入る。すると、鳥のフレンズさんがにっこり笑顔で迎えてくれた。

「いらっしゃいませ。ロッジアリツカへようこそ！　私は管理人のアリツカゲラです」

「どもどもーフェネックだよー」

「今日は宿泊でよろしいですか？」

「うん、たぶんそうなるけど、その前に聞きたいことがあるんだー」

ここにオオカミさんはいる？　って聞いたら、アリツさんは首をかしげてどっちのオオカミさんでしょう、と聞き返してきた。ロッジにはタイリクオオカミさんとニホンオオカミさんがいるみたい。言われてみればどっちか知らないや。

じゃあ二人ともに会って確かめればいいや。アリツさんに二人の居場所を聞くと、ちょうど二人とも同じ場所にいるらしい。アリツさんに案内されてそこへ向かった。

何本か橋を渡ったりくり抜いた木のトンネルをくぐったりして着いたのは、小屋の一室。そこで二人のオオカミさんが机について話し合ってる。

「知ってるかい、ニホンオオカミ。夕方は逢魔が時っていってね。この世ならざる者が動き出す時間なんだ。もしかすると君に狩られたセルリアンたちが、オバケになって出てくるかも……！」

「……」

「お、いい顔いただきました」

「……少し、風にあたってくる」

チェック柄の毛皮を腰にはいた、明るい色合いのオオカミさんが小屋を出ていく。少し顔が青いけど大丈夫かな。

後に残った暗い色合いのオオカミさんに近づいてみると、机の上の白いペラペラ？に絵を描いてる。今出ていったオオカミさんの似顔絵だった。すっごく上手。

「ん？　ああ、こんばんは。ここのお客かい？」

そうだよー、フェネックだよーと自己紹介しながら、ハンターをやってるオオカミさんを探してると伝える。すると、今話してるのがタイリクオオカミさんで、チェック柄毛皮の彼女がハンターのニホンオオカミさんと教えてもらった。

「ふふっ、あの子、セルリアンには強いけど怖い話にはめっぽう弱いんだ。見たかいさっきの顔」

「無表情にしか見えなかったよ？」

「そう？　あんなにいい顔だったのに。……ああ、探してるんだったね。たぶん今日はキリンのところに逃げ込んでると思うよ」
怖い話を聞いた後はきまって誰かといっしょにいたがるんだ、とタイリクオオカミさん。怖い話が苦手なのにタイリクさんの話に付き合うのは、優しいからなのかな。
キリンさんの居場所を聞いて移動する。外に出て階段を登り、二階に上がるとすぐに見つかった。
「今日こそはあなたが何のフレンズか推理してあげるわ！　ちょ、なんか近いわね」
まださっきの話が尾を引いてるんだね。青い顔でキリンさんっぽい子にすり寄ってるよ。キリンさんは慣れてるのか、あんまり気にせず話し続ける。
「無口で暗いところを好む習性、無愛想で仏頂面、そしてすごく強い……これらのことからあなたが何の動物か、私にはお見通しよ！」
「……」
「あなたは、忍びね！」
「言えぬ……」
「なっ、相変わらず強情な！　じゃあオオカミ、イエイヌ、チワワ、これならどう!?」
「明かせぬ……」
「この、吐きなさい！　それと近すぎ！」

この子がオオカミさんかー。怖がってキリンさんにすり寄る姿は、噂と全然違う。無表情のまま声もあげずにセルリアンを狩りまくる怖いフレンズって聞いてたのに、普通の子だよ。悪いことするようには見えないけど、かといってシロヘビさんが嘘をつくとも思えない。もしかすると、フレンズになったことで性格が少し変わったのかも？

とにかく一度お話した方が分かることも多い。そう考えて近づいていくと――

「見つけたぞオオカミ！　ここで会ったが百年目！」

「おお、あいつがオオカミか!?」

私がいるのとは反対側の階段から、シロヘビさんとアライさんが上がってきたよ。

キリンさんとオオカミさんは急に大声を出されてアタフタしてる。

「なになに!?　ていうかシロヘビ、あなた雰囲気おかしくない!?」

「おかしいもなにも、おぬしとは初対面だろう！　それよりオオカミ！　前世の恨み、今ここで晴らしてくれる、覚悟！」

ちょっと待って、と割り込む暇もなかった。シロヘビさんがサンドスターを消費しながら、全力でオオカミさんにつっこんでいく。問答無用だねー。

まあオオカミさんなら大丈夫なはず。どんなセルリアンの攻撃も爪で弾いて無効化しちゃうってもっぱらの噂だからね。博士に怯えてるようなシロヘビさんのビンタくらい、軽く弾いて――

危　怖
　　気

どごん、と大きな岩が落ちたような音。視界をよぎる、変な文字。
がけ崩れでも起きたような轟音を発したのは、シロヘビさんの手がめり込んだオオカミさんのほっぺただった。
「えっ」
私か、アライさんか、キリンさんのものか、思わず声が出ちゃう。
だってオオカミさんの体が、へいげんちほーのボール遊びみたいに、ぐるぐる回転しながら吹っ飛んでいくんだもん。
オオカミさんはロッジの入り口の方まで飛んでいき、地面を何度か転がって止まる。
起き上がることは、なかった。
「……類まれなる強者の中には、防ぐことも弾くことも叶わぬ攻撃を行う者がいる。つまり、そういうこった」
「し、シロヘビさん、やってしまったねぇ……」
「オオカミィーー！」
キリンさんの声で我にかえった。なぜか頼もしいモードになってるアライさんはほっといて、オオカミさんのもとへ走る。

橋を渡って階段を降りて、ようやくたどり着いた頃には、ロッジに泊まっていた他のフレンズさんも集まってきていた。フレンズさんの間をぬって、強引にオオカミさんのところへ行く。

やばいよやばいよ。シロヘビさんはどれだけ強い動物だったのさ、フレンズさんがあんなに吹っ飛ぶの見たことないよ。

すぐに手当してジャパリまんをたくさん食べさせないと、いくら頑丈なフレンズの体でも――！

「あれー？」

オオカミさんは平然と立ってた。

毛皮に土の汚れがついてたり、顔に白っぽいアザができてる以外は、大きなケガもない。おかしいなー、めちゃくちゃ痛そうな吹っ飛び方に見えたのに。

でも、無事なら別にいっか。

「さすがオオカミさん、強いのだ！」

「当然。こやつは死んでも死なぬ。そういった動物だ」

「その言い方だと一度死んだみたいで怖いからやめようよー」

アライさんとシロヘビさんもすぐそばに追いついてきてた。シロヘビさんの姿を見たオオカミさんがびくっと肩を震わせてたのはしょうがないね。

「うちのシロヘビさんがごめんねー。オオカミさん、痛かったでしょ」
「……構わぬ」
「……ふん。儂も気は済んだ。どうせ何をしようとあやつとは二度と会えぬのだ。お前を――」
「あのー、何の騒ぎでございましょう？」
いじけるシロヘビさんの声がさえぎられた。
別に大きくもないし、迫力があるわけでもないその声が騒ぎの中ではっきり聞こえたのは、シロヘビさんの声とそっくりだったから。というか、まったく同じってくらい似てる。
しかも声の方向を見てみたら、
「シロヘビさんが、もう一人？」
完全に同じ外見のシロヘビさんがもう一人、こっちに歩いてきてた。
「すごい音がしましたが、セルリアンが出ましたか？　それともケンカでしょうか。ダメですよ、パークの掟其の二を忘れてはいけません。フレンズは――」
私たちのシロヘビさんと違って、おっとりした口調のシロヘビさん。
略しておっとりシロヘビさんは、呆然としているシロヘビさんと目があう。
「旦那様!?」

「お前?」
「どーゆーことなのだ!?」
「こっちが聞きたいよー。でも……」
ハラハラと涙を流しながら抱き合う二人を見ていると、なんだか幸せな気分になってくる。だからきっと、悪いことじゃなかったんだと思う。
今はそれだけ分かればいいや。
とにかくオオカミさん。
大きなケガはないけど、小さな傷や土埃まみれになったオオカミさんの毛づくろいをしてあげなきゃね。

シロヘビさんビンタ事件から一夜明けた朝。
ロッジの一室で、私、アライさん、キリンさん、タイリクオオカミさん、オオカミさんの五人が机について、朝ごはんのジャパリまんを食べてる。特にオオカミさんは昨日のケガでサンドスターを消費したからか、もりもり食べてるねー。
「シロヘビさんたちが幸せになってよかったのだ!」

「まあ少し過程が暴力的だったのは感心しないが。本人たちが納得してるなら何も言わないでおこう」
「オオカミさんは災難だったねー」
「む」
　オオカミさんは気にせずジャパリまんを頬張ってる。やっぱり無表情にしか見えないや。
　ロッジに泊まっていた方のおっとりシロヘビさんは、私たちのシロヘビさんが「伴侶」と呼んでた相手だった。オオカミさんと同じ世代に生まれて、特にやることもなくロッジでダラダラしてたんだって。そこにやってきた私たちのシロヘビさんと再会した、と。
　過ぎたことをクヨクヨ気にしすぎです、とシロヘビさんは伴侶さんにこってり怒られてた。オオカミさんにもやりすぎてごめん、ってきちんと謝ったし、シロヘビさんたちはまた二人で暮らせる。万事解決――何か忘れてる気もするけど。
「でもすごい偶然だよねー。同じフレンズが同じ世代に生まれるなんて」
「一世代につき一個体と聞いたんだが。サンドスターも気まぐれを起こすことはあるってことかな」
「こんな気まぐれなら大歓迎なのだ！　ところで、シロヘビさんたちは今何してるのだ

？」
「ナニってそりゃあ……ロッジのお部屋を借りてどったんばったんしてるよー」
「昨日の騒ぎの後からずーっとな。アリツさんに頼んで部屋変えてもらったよ、まったく。蛇のフレンズはみんなああなのか？」
タイリクオオカミさんはあくびを一つ。どうなんだろうねー、さばくちほーで会ったツチノコさんとかも、実はすごかったりするのかな？
「しかしオオカミ。そのアザなかなか治らないな」
「ホントだねー。痛くない？」
「問題ない」
オオカミさんの小さなケガは一晩で全部治ったけど、顔の左半分にできた白いアザだけは消える気配がない。もし本当に痛かったら、表情の読めるタイリクオオカミさんが察するだろうし、大丈夫かな。
そうして心配事は全部丸くおさまった、はずなんだけど――
「フェネック、アライさんは何か大切なことを忘れてる気がするのだ」
「奇遇だねー私もだよー」
オオカミさんが吹っ飛んでいくところとか、もう一人のシロヘビさんとか。いろいろあったせいで何か忘れてる気がする。

うーん、なんだろう。そもそも私たちはなんでロッジまで来たんだろう。後少しで思い出せそう――

「まあいいのだ。大切なことならそのうち自然と思い出すのだ。それより、改めてこのロッ
ジを探検したいのだ！」

「それもそっか。じゃあのんびり見て回ろうか」

「ちょっと待った、その前にこれを見ていくといい。これはマンガといって――」

タイリクオオカミさんがマンガを見せてくれたよー。

他にも色々なフレンズさんが泊まってるみたいだから、ロッジには見どころがたくさんあるねー。

先を急がず、ゆっくりいこっか。

葦名弦一郎

パークにはおっきな山があって、そこから噴き出たサンドスターが動物に当たるとフレンズになる。

かばんちゃんとボスと私の三人は、今その山を登ってるよ。

「はあ、はあ……けっこう来たねー。ちょっと休まない？」

「うん。ごめんね、サーバルちゃん」

後ろを振り返るといい景色。さっき歩いてた森とか、船のある港や海なんかが見渡せる。あの黒いセルリアンがいなかったら、のんびり休憩できるのにな。

私たちはさっき、山のふもとでとても強いセルリアンに会った。ハンターのキンシコウが助けてくれたんだけど、あれだけ強くても本体から飛び散った、ただの破片なんだって。

本体の方は今キンシコウやヒグマたちハンターがやっつけてて、私たちも手伝おうとした。でもヒグマに断られちゃったのと、かばんちゃんが「嫌な予感がする」っていうから、噴火する山の様子を見に来たんだ。

「かばんちゃんはみんなが心配なんだよね」

「うん……すっごく怖い、のはいつものことなんだけど、あのセルリアンは……ん？」
「あっ、またミライさんが出てくるよ！」
　ボスの目が緑色に光って、ミライさんの『えいぞう』が出てくる。えいぞうって、ボスが覚えてる昔のミライさんの思い出みたいなものなんだって。
　ミライさんの言うことは難しいけど、山のサンドスターとセルリアンが何か関係あるってことだけ分かった。かばんちゃんはこのことが分かってたから山に登ろうって言い出したんだね。
『巨大セルリアンを一刻も早く仕留めないといけません。フレンズさんたちが心配ですし、葦名の特異個体にどんな刺激を与えるか――』
『ミライさーん、大変だよ！　オランウータンとライオンが！』
『なっ、言ってるそばから!?　セルリアンと山については後日まとめます、録画終わり！』
「えっ、今、葦名って言った!?　かばんちゃん！」
　あしなはかばんちゃんの故郷、ゲンイチローの縄張りだよ。港には船だけあって他のゲンイチローはいなかったけど、海の向こうの日の本にあるあしなには、いっぱいゲンイチローがいるかもって、博士たちが言ってた。
　ミライさんのえいぞうはもう終わってるけど、かばんちゃんなら何か分かるかも。そ

う思ったけど、
「サーバルちゃん。今はそれよりも為すべきことがあるよ」
そうだよね。あの巨大セルリアンを放っといたら危ないもん。かばんちゃんはみんなのために頑張る子なんだから。
セルリアンの黒くて大きな体が森で暴れてるのが、ここからでもはっきり見える。みんながケガしないうちに早くなんとかしないと。
私のハアハアが収まってから山頂に向けて出発。
山頂には大きな穴があいてて、その穴にサンドスターの塊がこびりついてる。塊を中心に、穴をふさぐみたいにして網目のフタがあるけど、フタの隙間から黒っぽい粉が噴き出てる。この粉もサンドスターなのかな？
「ミライさんの話が本当なら、ここに何か……サーバルちゃん、何か変わったものがないか探そう」
「え？」
「ミライ殿は四神と仰せだった。大陸の守護獣がここに配され、それらに不備が生じているとすれば、パークにどんな害を及ぼす分からぬ。まずは四神を見つけねばならん」
「分かった！」
とにかく探しものをしなきゃいけないのは分かったよ。かばんちゃんがそう言うっ

てことは、四神を見つけて何かすれば、セルリアンを退治できるのかな。
手分けして探そうとすると、
「……！」
「え、なになに!?」
誰かがかばんちゃんの背中に飛びかかった。
オランウータンさんに作ってもらった『本物の』刀で誰かの爪を弾き、かばんちゃんが距離をとる。
「見事な隠密だ。だがオオカミには及ばぬ」
「へっ、盗人にしちゃあやるじゃねえか。アライさんの黒笠、殺してでも返してもらうぜ」
「ええー!?　ちょっと待ってよ、君、なんなの!?」
いきなり爪で飛びかかってきたアライさんの前に出る。
かばんちゃんは戦うのが得意なフレンズじゃない。黒セルリアンのときも「オオカミとの戦いがなければこの程度！」って強がりながら逃げ回ってたし。
何より、かばんちゃんは悪い子じゃないんだ。
「かばんちゃんは誰かのもの盗るような子じゃないよ！　ていうか黒笠って帽子のこと？　黒くないし笠でもないじゃない。きっと勘違いしてるよ！」

「い、言われてみれば笠じゃなかったのだ」
「確実に勘違いなんだけどねー」
「名乗りもあげず不意打ちとは、武士(もののふ)の風上にもおけぬ。ここで成敗してくれるっ！」
「かばんちゃんもゲンイチローを収めて！」
かばんちゃんをなだめていると、後からやってきた耳の大きなフレンズが、飛びかかってきたフレンズを落ち着かせてる。
そうしてお互いに落ち着いてから、お話をはじめたよ。

アライさんはかばんちゃんに帽子を盗まれたと勘違いして、フェネックといっしょにさばんなちほーから追いかけてきたみたい。でもきちんとお話してかばんちゃんがそんなことする子じゃないって分かってくれたよ。帽子のことは諦めきれてないけど、ひとまず仲直り。
そしたら黒っぽい粉が急に噴き出してきて危ない感じだったから、二人にも四神を探すのを手伝ってもらう。見つけた四神をアライさんが持って、私がアライさんを肩車して山の大穴に掲げたら、黒いサンドスターが収まった。

これで山の心配事は解決。
次はセルリアンをどうにかしないと。
というわけで、山を降りてヒグマ、キンシコウ、リカオンたちハンターと合流したよ。
丸太に座った七人で輪を作って、作戦会議だね。
作戦を考えるのはもちろん賢いかばんちゃん。ふんふん、夜になってからバスの光でセルリアンを海に――船に乗っけてから転ばせて、沈めちゃう――えっ!?
「かばんちゃん、でもあの船は……!?」
「良いのだサーバル。元より海の先に日の本がある保証もない。何より俺は……いや」
あしな、あしなってあんなにうるさかったのに。かばんちゃんはそんなにパークのことを大切にしてくれるんだね。
かばんちゃんが何かを言いよどむと、ヒグマたちがしょんぼりと俯いた。
「すまない、お前の使うはずだった船を……」
「面目ありません」
「ハンターでもない皆さんに面倒をかけてしまったっす……」
面倒なんかじゃないよ。あんな危ないセルリアンを任せっきりじゃ申し訳ないし、黙って見てられないから。
「パークの掟もこう言ってるのだ。皆仲良く笑って暮らすべしと。そのためにもあのセ

ルリアンは倒さなきゃなのだ」
「そうか……そんな掟初めて聞いたが」
「誰から聞いたんですか？」
「博士たちが言ってたのだ！　ちなみにパークの長に逆らってはいけない掟もあるのだ」
「博士たち、しれっと変な掟作ってるっすね」
　図書館に行ったとき私たちも「ひとぉつ！」って言われてびっくりしたよ。博士たちは賢いけど、ちょっと変わったところあるよね。
　みんなでくすくす笑ってたら、ヒグマが「そうだ」って何かを思い出したみたい。
「ところでオオカミのやつはどうした？　あいつがいれば心強いが」
「こないだフレンズさんとケンカしてケガしちゃってねー。変なアザが全然治らなくて、念のためロッジで休んでるよー」
「あのオオカミさんがケガ、ですか!?」
「どれだけ強いフレンズさんとケンカしたっすか!?」
　オオカミちゃん、ケガしてたんだ。ほんとはこういうとき頼りになる子なんだけど、ケガなら仕方ないね。ヒグマたちは「この戦いが終わったら見舞いに行くか」って話してる。私もこの戦いが終わったら、かばんちゃんといっしょにお見舞いに行こっかな。

あ、でもかばんちゃん、オオカミちゃんの名前が出た途端すっごく嫌そうな顔してる。いっしょに行くのは無理かも？

お話してるとあっという間に時間が過ぎて、日が暮れた。

セルリアンが追いかける太陽を見失ったところで、作戦開始ー！

山みたいにおっきな黒セルリアンが目の前に迫る。

バスの光めがけて腕を叩きつけ、その拍子に真っ黒な破片が飛び散って、バスの走る先を塞ぐ。危ない、と思ったけど、ボスの上手な運転でうまく隙間をぬけていくよ。

落っこちてた木の枝を踏みつけてバスが動かなくなっても、「ぱっかーん」と掛け声をあげて乗り切った。

「ボス、今日はかっこいいね！」

「油断するな、海はまだ遠いぞー！」

かばんちゃんはオランウータンに手直ししてもらった弓で、何回も矢を打ち出してる。セルリアンは全然痛そうにしないけど、飛んでくる矢が気になるみたいで、振り上げた腕を止めて矢に気を取られたりしてる。

この調子なら港まで行けそう。

そうやって油断したのが悪かったのかな。

四本足で歩いていたセルリアンが、二本の足で立ち上がる。ただでさえ山みたいに大きな体がもっと大きくなって、しかもその体がまっすぐバスに向かって倒れ込んできた。

大きすぎて避ける隙間なんてない。

雷が落ちたような音がしたと思ったら、私とかばんちゃん、ボスはみんなバスの外に投げ出されてた。セルリアンはもう目の前。横倒しになったバスを起こして乗り込む暇はなかった。

何も考えず、かばんちゃんとボスを抱えて力いっぱい放り投げる。できるだけセルリアンから遠くに行くように。

直後、セルリアンの腕が横から飛んでくるのが見えた。

「わっ……!?」

オオカミちゃんみたいにはいかないや。

とっさに爪でセルリアンの腕を弾こうとしたけど、失敗。セルリアンに食べられちゃった。

なんだか暖かくて眠い。セルリアンに食べられるのってこんな感じだったんだ。

とっさに野生開放して防ごうとしなかったら、食べたれた瞬間に気絶してたかも。

黒っぽいセルリアンの体越しに、呆然とこっちを見上げるかばんちゃんが見える。遅れてやってきたヒグマと何かを話し合って――えっ？　ヒグマだけボスを抱えて逃げちゃったよ？　ダメだよ、かばんちゃんも逃げなきゃ。

逃げて、と叫びたくても口が動かない。

かばんちゃんの体から、噴き出す温泉みたいにサンドスターが噴き上がる。刀と弓を構え直すかばんちゃんの目は真っ赤に輝いてて、セルリアンの方に向かってきた。

まずいよまずいよ、サンドスターはセルリアンの好物なのに。あんなに野生開放してたらセルリアンに狙われちゃう。それだけじゃなくて、サンドスターを使い過ぎたら動けなくなる。逃げる元気もなくなっちゃうかもしれないのに。

いくら逃げてと叫びたくても私の体は動かなくて。かばんちゃんが必死で戦う姿を見ることしかできなかった。

弓をセルリアンの目に打ち込んで、気をそらす。その間に足元へ潜り込んで、何度も足を斬りつける。一度ジャンプしてから目で追えないような速さで何度も、何度も刀を振る。

セルリアンは両腕を振り回して食べようとするけど、ひらりひらりと葉っぱみたいに舞うかばんちゃんを捕まえられない。でも、かばんちゃんは一度刀をふるたび、一歩動

くたびにサンドスターをたくさん散らしてる。
もういいよ。そんなにサンドスターを使ったら、逃げる元気どころか――
体中の毛が総毛立った。さばんなちほーで初めて雷を見たときみたいに、ぴりぴりした感覚。さっきまで晴れてたのに、いつの間にか黒い雲が空に広がってた。
セルリアンの腕を大きく飛び上がって避けるかばんちゃん。
瞬間、空がぴかっと光る。
光の筋がかばんちゃんの刀にまとわりついて――雷の刀が、セルリアンの腕に大きな切れ込
みを入れた。
バランスを崩して倒れるセルリアン。
かばんちゃんは私のいる背中の側まで走ってきて、刀をひと振り。小さな切れ込みから腕をつっこんで、私の手をつかんでくれた。
黒く濁っていた視界がひらける。
真っ赤な目でセルリアンをにらみつけながら、膝を突いて息を荒げるかばんちゃん。その向こう側でゆうゆうと起き上がるセルリアンの姿が見えた。
体が重くて、私は気絶しないようにするのが精一杯だった。
このままじゃ二人とも食べられちゃう、かばんちゃんだけでも逃げて、と言うことさ

えできない。
「サーバル」
何するの、かばんちゃん？　紙の棒に火をつけて。そんなことしたらセルリアンの気をひいちゃうよ。
「俺はいつも、肝心な時に誰かを頼ってばかりだった」
かばんちゃんの背中が遠い。
「大切なものを護ることさえできず、死人（しびと）から返った今生（こんじょう）も、その無力は変わらぬ。結局、俺は何もできなかった」
そんなことないよ。かばんちゃんはすっごいんだから。
声をあげたいのに、手を伸ばしたいのに、私の体は動かない。
「だが……お前とかばん。たった二人だけを護る程度なら。全霊をかけてかろうじて、成し遂げられるようだ」
かばんちゃんが離れていく。よろよろと疲れきった足取りで、火を見せつけるように。火に気を取られたセルリアンも、私から離れていった。
セルリアンが私のことを忘れるくらい遠くにいったところで、力尽きたように膝をつくかばんちゃん。
暗い中でも、遠く離れていても。ゲンイチローを野生開放した真っ赤な目が私の方を

見ているのが分かる。振り上げられたセルリアンの腕なんか見てない。逃げて、避けてよかばんちゃん――

「さらばだ、サーバル」

私のおっきな耳がその言葉を聞きつけたと同時。

かばんちゃんの体は、セルリアンに取り込まれた。

――

目が覚めたのは港の船のとなりだった。気絶した私をここまで運んでくれたみたい。今はあれから数時間はたってて、日の出まで後少し。

かばんちゃんはセルリアンに食べられた私を助けてくれた。じゃあかばんちゃんだって助けられるはず。そう考えて走り出そうとしたけど、ヒグマに切り替えろ、って言われちゃう。切り替えてかばんちゃんの作戦を最後までやろうだって。

そんなの無理だよ。あんなに必死で助けてくれたかばんちゃんが食べられたことに納得して、はい終わりなんて無理にきまってるじゃない。

「ボスも何か言ってよ！　あ、そっか。かばんちゃんがいないと……」

『サーバル。船ノコトハ僕ニ任セテ、君トヒグマハカバンヲオネガイ』

「ほら、ボスもこう言ってるし！　え、今話してくれた!?」
　ボスはかばんちゃんがいないとしゃべってくれないはずなのに。ヒグマたちも驚いてるよ。
　ヒトの緊急事態が、生態系が、干渉？　うーん、よく分かんないけど、今はそれよりかばんちゃんだよ。船はよろしくね、ボス！
「よし、お前たちの視点で動いてみよう。キンシコウとリカオンは船を頼む。何かあったら逃げろよ！」
「分かりました」
「オーダー、了解っす」
『サーバル』
　ヒグマといっしょに走り出そうとしたら、ボスに呼び止められる。
『カバンハ大丈夫ダヨ。ダカラ、安心シテ』
「ええ？」
『四人デノ旅、タノシカッタヨ』
「??　でもそうだね、楽しかった。またみんなでいろんなとこ回って、楽しいこと探すんだから！」
　そのためにも絶対かばんちゃんを助けなくっちゃ。

ヒグマの後を追ったよ。

――――

かばんちゃんが切りつけたセルリアンの切り傷を、私の爪とヒグマのクマクマスタンプで引っ掻いて、叩く。それでも歩みが止まらない。

後少しで港が見えてくる。港の灯りを目指して走り出す前に、かばんちゃんを助け出さなきゃいけないのに。セルリアンの体は固くて、いくら引っ掻いても切り傷が少し深まるだけだった。

「サイキョーすぎるだろ……！」

ヒグマの声が聞こえたそのとき、ぽすっと音を立てて、セルリアンの体から何かが落ちてきた。

かばんちゃんのかばん。それから、刀。

「林を越えたら船を見て走り出すぞ！　離れろ！」

ダメだよ。まだかばんちゃんが、かばんちゃんが――！

「かばんちゃんを返してよ！　怖がりだけど優しくて、いろんなこと考えて、みんなのために必死になって、強がってばかりだけど自信がなくて……まだ縄張りだって見つけて

ないのに。いっぱい見て回るとこだってあるのに――返してよっ！」

きん、と高い音が二回響く。

私が何度引っ掻いてもびくともしなかった切り傷が、大きくえぐれてた。

「少々本気を出すですよ、助手」

「はい博士。敵を穿ち、自在に宙空を舞ってこその梟なのです」

「博士!?」

図書館にいるはずなのに、と思ったけど、ボスがどうにかして呼んでくれたみたい。

かわりばんこに切り傷を爪で引っ掻いて、引き裂いて。セルリアンの体勢が大きく崩れる。そしたら、いつの間にか合流してたリカオンとキンシコウの手を借りて大ジャンプしたヒグマが、野生開放した本気の一発を叩き込んだ。

セルリアンの足が切り傷を中心に折れて、倒れ込む。

私は足の断面から出てきたかばんちゃんをキャッチ。丸っこいサンドスターの塊みたいになってるけど、かばんちゃんだよ。かばんちゃんを助けられた。

「今ですお前たち！　総攻撃なのです！」

「我々の群れとしての強さを見せるのです！」

「ちょ、博士、かばんの作戦が――」

博士の号令で森からたくさんのフレンズたちが飛び出してきた。かばんちゃんが今

まで出会ってきた子たちだ。かばんちゃんのためにみんな集まってくれたんだね。

プレーリードッグ、スナネコ、フェネックの掘った穴にセルリアンがつまずく。下がってきた背中に、戦いの得意なフレンズたちが野生開放した攻撃をどんどん入れていく。

ジャガー、タイリクオオカミの爪で大きな破片が飛び散った。空から降ってきたライオンの爪と、オニカゲに肩車されて跳んできたヘラジカの角で、体に埋もれてた弱点の石が丸見えになる。

最後はその石を、ケガして休んでるはずのオオカミちゃんが引っ掻く。

石を砕かれたセルリアンが大きな岩になって動かなくなったとき、いつもの「忍⊠」の文字が見えた。

「そんな作戦があったなら先に言ってほしいのです」

「言おうとしたらみんな出てきて、止めるに止められなかったんだよ!」

「まあまあ、結果的に倒せたんですから」

「セルリアンは一段落っすよ。それより今は――」

博士とヒグマたちの話し声が聞こえる。
集まってくれたフレンズたちが輪になって、じーっと視線を送ってくるのを感じた。輪の中心にいるのはかばんちゃん。
でも、かばんちゃんはもう元の形じゃない。サンドスターの塊みたい。
「かばんちゃん、かばんちゃん……！」
「やめるのです、サーバル」
「もう自然に還り始めているのです」
やだよかばんちゃん。まだいっぱい話したいことあるのに。葦名に行くって言ってたじゃない。博士と助手もそんなこと言わないでよ。
——えっ？
「うーん……サーバルちゃん？」
急にもとの形になったかばんちゃん。目をこすりながら起き上がり、私の方を見た。
「かばんちゃんだよね？　私のこと覚えてる？　最初に会ったときにしたお話覚えてる？」
「……食べないでください」
「食べないよ！」
セルリアンに食べられたら記憶を失うって聞いた。でも、かばんちゃんは大丈夫。私

の知ってるかばんちゃんだ。
「博士、これは一体……ゲンイチローのフレンズだとすると、ゲンイチローに戻るはずでは？」
「やはり、かばんはヒトだったのです。そもそもゲンイチローなんて動物聞いたことないのです」
「けものがヒトの特徴を得たものがフレンズ。ならヒトのフレンズがフレンズでなくなっても、ということですか。ですが、それならゲンイチローとは一体何なのです？」
「さあ……サンドスターが呼び寄せた、怨念の類では？」
「うわっ、オオカミが倒れたぞー！」
視界の隅っこで「怖気」って変な文字が見えた気がしたけど、博士たちが話してる意味も全然分かんないけど。
かばんちゃんが無事だったから、もういいや！

黒セルリアンをやっつけてから一ヶ月。
普段、別々のちほーに暮らしてるフレンズがこんなにたくさん集まることはないか

ら、近くのゆうえんちに集まって毎日盛り上がってた。今日はかばんちゃんが助かってよかったってことと、旅立ちを見送る会をやるよ。船が無事だったから、かばんちゃんは日の本に行くんだ。

でも最近、かばんちゃんは一人でふらっとどこかに消えちゃう。どこにいってるんだろ。

一人のときにセルリアンと会ったら大変だし、どこにいってるか気になるし。ってことで今はかばんちゃんの後ろをこっそりついてってるよ。

黒セルリアンと戦った森の広場を通って、海沿いの崖を進んでいく。そしたら崖が海にせりだしたところに着いた。崖際には大きな石が置かれてて、その前にかばんちゃんが座ったよ。

「かばん――」

声をかけようとしたとき、別の草むらからオオカミちゃんが出てきた。

私に気づかないままかばんちゃんの隣に歩いていき、何か話し出す。うう、海風がひどくて私の耳でもよく聞こえないよ。「ゲンイチローさんが――ボクの輝き――身代わりになって――」ゲンイチローのことを話してるのかな？

って、私ったらいつまで隠れてるんだろう。

「おーいカバンちゃん！　オオカミちゃん！」

「む」
「サーバルちゃん」
普通に出ていって声をかけるよ。
「よかったー、二人とも仲良しになったんだね！」
さばんなちほーで会ったときはひどかったけど、仲直りできたんだ。
そのことを聞くと、かばんちゃんは悲しそうに目を伏せちゃった。あれ？
「うん……オオカミさんと仲が悪かったのはゲンイチローさんなんだ。だけどゲンイチローさんはもう……」
「ええ？　どういう意味？」
「……ううん、なんでもない」
かばんちゃんは難しいことで悩んでるみたい。そういえば、最近声が低くなって雰囲気が変わることがなくなった。悩んでるせいで元気がなかったんだね。
難しいことは分かんないけど、隠れて悩んでるってことは話したくないのかな。じゃあ話を変えなきゃ！
「えっとえっと、ところでここ、きれいなとこだねー！」
「あ、うん。ゲンイチローさんも景色のいいところで眠りたいかなって」
「眠る？　ここで寝るの？」

「じゃなくて、お墓だよ。お墓っていうのは――うわぁ!?」
すっごく嫌な音がして耳をふさいだ。なになに、と思って見てみたら、崖にぽつんと置かれた石をオオカミちゃんが引っ掻いたみたい。
かばんちゃんが泣きそうな顔になってる。
「オオカミさん!?　な、なんでそんなひどいことを!?」
「……胸を張れ」
「え？」
「志に殉じた者の墓前で……そのような顔をするな」
かばんちゃんがはっと息を呑んだ。うみゃー、また難しい話だよ。
「胸を張って生きよ。それが手向けだ」
「……はい！　え、でもなんで引っ掻いたんで――オオカミさん!?」
オオカミちゃんはくるっと振り向いてどこかに行っちゃった。言いたいことは言った、って感じだね。
呆然としてたかばんちゃんは、首をかしげながら石の方に向き直って、目をまんまるにした。うわぁ、あの一瞬で石が傷だらけだよ。
あれ？　でもこの傷、忍⊠マークと同じ文字みたいに見える。

おかしいな。早起きしたからかな。それとも悲しいことでも書いてあるのかな。何か大切なものを失ったような気がして、涙がどんどんあふれてくる。ぬぐってもぬぐっても。

かばんちゃん、この石に何が書いてあるの？

聞こうとしたけど、かばんちゃんが一度目元をぬぐって、腰にさしてた刀を石の前に突き立てるから、なんとなく聞きづらい。

雰囲気はかばんちゃんそのもの。でもどこか頼もしくて、見た目よりも大きく感じる。

きりっとしたかばんちゃんは胸を張って、きっぱり言う。

「さらば」

その言葉は風よりも雨よりも雷よりも力強く、私の耳に響く。

止まらない涙が、止まった。